

戦争の不条理と平和のありがたさ

園長 児嶋 草次郎

方舟館周辺の梅の木がほぼ満開で、かすかな芳香を発していますが、まだまだ寒い日が続いています。日本スイセンも、寒さに負けず庭のあちこちで白い花を元気に咲かせています。

今から 145 年前の明治 10 年、ちょうど今の時期の 2 月 15 日、鹿児島を 4000 人の薩摩軍（西郷軍）が前日の 300 人の偵察隊に続いて先発隊として出発しています。この日は、50 年に一度と言われる大雪であったとか。そうです。西南戦争の始まりです。「旧薩摩藩士を中心とする士族が、明治新政府の専制的な政治に反対して南九州一帯で起こした国内最後の内戦」（「西南戦争のリアル田原坂」 中原幹彦）です。動員された兵力は、薩摩軍が総勢約 5 万人、政府軍は約 6 万人で合わせて約 1 万 4000 人の若者が命を落としたそうです。

さて、友愛園の中・高生たちと職員総勢 41 名は、12 月 18 日から 19 日にかけて、熊本旅行に出かけました。名付けて「田原坂旅行」。主に田原坂の戦いを学ぶための旅です。

なぜ「田原坂」なのか。石井十次の父親の万吉が、この田原坂の戦いに薩摩軍に組して参戦、さらに戦いから約 1 年後には高鍋島田小学校を卒業した石井十次（13 歳）が、わざわざこの田原坂の戦いの跡地視察に出かけているのです。その視察は、石井十次の意志というより父親万吉の教育的配慮による指示だったと思うのですが、父親の思い・目的とは何だったのか、そのことがずっと気になっていて、なんか糸口でもつかみたく今回初めて訪れることになったのです。幸いコロナも収束状態にありましたので、実現できました。子供たちはもちろんですが、私も初めての訪問でした。

石井十次少年はその視察から何を学んだのか。これも大きなナゾです。西南戦争が終ってまだ 1 年弱（明治 11 年 4 月～5 月）であり、熊本城はもちろん焼け落ちたままであるし、多くの町もまだ焼け野が原で、特に激戦地田原坂周辺は、野山も荒れはて、故郷から遺体捜し（骨拾い）に来た人たちが殺気立っていたのではないかと。その時の感想をその後十次が書きとめているわけでもなく、想像するしかないのですが、この時の衝撃は彼の人生に大きな影響を与えたのだらうと、私は今強く感じています。

この「一泊旅行」後の感想文に、子供たちは次のようなことを記していました。

「政府軍と薩摩軍の戦いの中、親子や兄弟が敵として戦っていたと知り、ひどく驚きました。」（高 3 しょう）

「私より年下の 14 歳から戦争にかり出されていて、まだ 10 代の人たちが数えきれないくらい亡くなっていた。多分たくさん夢があったのに、戦争のせいで、この世に未練があるまま亡くなっていったと思います。」（高 2 りょう）

「高鍋町から戦争に行き、亡くなられた方もいたと聞きました。その話を聞いた時に、ゾッとしました。もうこのような戦争を起こさないように、起きないようにしたい。」（高 1 れん）

「兄弟や家族と戦い合って殺し合う戦争が起きていたことを知り、心が傷みました。」（中 3 な

つこ)

「薩摩軍の中には、13歳でなくなった人もいと聞き、とても驚きました。」(中3 ねね)

「親子や兄弟ですら敵になってしまうつらさ、今では考えられない出来事だったのだ」(中3 ちよ)

時代背景や価値観は当時と今では随分違いますが、13歳の石井十次と現代の子供たちの感性はそう変わらないのではないかと、そうも思えて来ます。そうだとするならば、石井十次の父親のねらいがうまく達せられたということになるのでしょうか。

その後石井少年は東京の「攻玉社」という軍人養成の学校に入学(14歳)しますが、1年足らずで退学帰郷。記録ではその理由は「脚気にかかった」ということになっています。もしかしたら、軍人になることに違和感を感じたのかもしれませんが。他の学生たちと同じ寮生活をしているのに、十次だけが脚気にかかるというのも考えてみればおかしなことです。当時の価値観から言えば、男は、軍人になって世のため人のため生きるという人生が一番輝かしい生き方であったはず。親類縁者の期待・信頼に答えるために、東京に行ってはみたけれど、軍人は、自分の肌に合わなかったというのが、ほんとうの退学の理由ではないかと思えてきます。そういう感性が後に孤児救済(福祉)の道に自らを導いていくことになったのでしょうか。人を救う方に自分の性格は向いていると感じたのではないかと。そう思えて来ます。

この中・高生旅行は、3年周期で熊本・鹿児島・大分と回っており、3年後もまたこの「田原坂旅行」をしたいと思います。その時のためにも簡単にこの旅行を振りかえっておきます。

12月18日(土)、雲一つない冷え冷えとした朝8時10分に、貸切りバスで友愛園を出発。水田周辺は-4℃で、霜で一面白く凍て付いています。昨年はコロナ渦中で中止にしましたが、今年も小康状態が12月に入って続いており決行しました。しかし、12月も後半に入り何だか忙しい気分でした。マスク着用とバスに乗る時の手の消毒については、徹底するように出発時に確認しました。

いつも熊本に行く時は高速道南回りで行くのですが、今回は、延岡から高千穂越えです。午後2時に熊本市田原坂西南戦争資料館に到着するまでに、途中、阿蘇神社と阿蘇大橋に寄りました。5年前(2016年)の熊本地震で崩壊、崩落したことはニュースで大きく報じられ、その後の復旧が気になっている場所です。

阿蘇神社は「神武天皇の孫神で阿蘇を開拓した健甞龍命(たけいわたつみのみこと)をはじめ家族神12神を祀り、2000年以上の歴史を有する古社」で「肥後国の一の宮として崇敬をあつめてきました」と、子供たちの作った資料には書いてありました。昔、私もまだ若く、子供たちと一緒にサバイバルキャンプをやっていた頃、テントをかついだままお参りしたことがあります。復旧工事はまだ続いていました。一方阿蘇大橋の方は、600mほど下流にりっぱに新しく作りなおされていました。地震の脅威については熊本城を見ても感じさせられることですが、深い谷の向こう側にたれ下ったままになっている以前の大橋の一部を見て、子供たちもこの大自然のエネルギーにショックを受けているようでした。

「田原坂西南戦争資料館」の存在については、今回訪ねるまで私たちは知りませんでした。りっぱなものでした。案内をしてくださる方の丁寧な説明により、私たちは、その戦争が、特に田原坂の戦いがいかに悲惨なものであったかを実感することができました。案内のしおりには次のように書いてあります。

「幕末維新期、江戸幕府を倒して新時代を作ったのは武士だったが、明治時代になると士族(元

武士) たちは冷遇される。明治新政府は急速に近代化を進め、世の中の仕組みを大きく変えた。徴兵令・懐刀令・秩禄処分などは新政府には必要だったが、士族たちは不満を増大させ、ついに破滅する。」

明治7年「佐賀の乱」、明治9年熊本「神風連の乱」、福岡「秋月の乱」、山口「萩の乱」など、その伏線となるような反乱はすでにおきており、鹿児島も一触即発の状況下にあったのです。政府はその動きの内偵のためスパイを鹿児島に送りこみますが、西郷隆盛の私学校生たちは西郷暗殺に來たと受け取り激高。政府の武器弾薬庫等を襲撃し奪います。西郷は若者たちの軽率な行動に怒りますが、もう後戻りできないと観念して、「私の体はみんなにあげよう」と身を若者たちにあずけてしまうのです。こうして7カ月間にわたるわが国最後の最大の内戦、西南戦争が始まります。

石井十次が何を学んだかということ想像する材料を収集するのが今回の旅行の目的とも言えますので、熊本市内の本屋で得た3、4冊の関連本の情報も交えながら、思いつくままに書きとめておきます。

①宮崎県は当時、鹿児島県に併合されていました。高鍋隊が200人余りを二小隊に編成して高鍋を出発したのは3月9日です(「高鍋町史」)。その中の輜重方(しちょうかた)の中に石井十次の父万吉の名前が見られます。輜重方とは、食料、武器、弾薬などの補給、輸送に責任を持つ兵士のことです。多くの人夫を雇いながら、荷車で運んだようです。

宮崎、高岡、小林、人吉、八代と通って、田原坂の戦いに参戦したのは、3月15、6日頃からのようです。戦闘に参加してわずか5日間で、高鍋隊は戦死者40名、負傷者35名を出したということです。その後も戦いは続くわけですが、「高鍋町史」には、1000人近い出兵、78人の戦死、と書いてあります。万吉がどこまで参戦したかは不明ですが、後方支援であり、冷静な目でその地獄の戦いを観察したに違いありません。資料館の外には、慰霊碑も建てられており、高鍋隊の戦死者たちの名前も刻まれていました。

②地獄の戦いとはどのようなものであったのか。「西南戦争民衆の記」(長野浩典)では、「西南戦争の教訓」として次のようにまとめています。

「戦場は、狂気が支配していた。相手を殺すだけでなく、死体を損壊し辱める。捕虜や探偵を平然と斬首し腹を割き、試し切りまでする。平気で戦死した兵士の遺体をみている婦人もいた。さらには、人肉を食おうとするものもあった。」

「戦争の本質とは、戦場の憎しみであり、狂気であり、結果としての限りない人的・物的な損失である。」

また、次のように書いてあるところもあります。

「薩軍はすぐに食糧不足や弾薬不足に陥った。その結果、薩軍は掠奪をせざるを得なくなる。各地で掠奪が行われた」。

先ほどの「高鍋町史」には、「熊本敗戦後は壮健な者も病と称して帰るものが多かった。」と記述してある所があり、石井万吉もその一人ではなかったかという気がしてきます。参戦する意味がないと判断したのではないか。戦争の大義名分に疑問を持ったのではないか。

③なぜ13歳の十次少年を現地視察に敗戦後行かせたのか。十次少年は、高鍋島田小学校を卒業する(明治11年4月30日)とすぐ、義兄の岩村真鉄(まがね)につれられて、熊本、長崎、鹿児島旅行に出かけます。今で言えば修学旅行でしょうが、その重みが全然違います。これから世に出ようとする我が息子に、広い視野を持たせようとした教育とも言えます。熊本では、(西南)戦争の不条理を体感させようとしたのだろうし、長崎は当時世界への人口(国際都市)ですし、世界的視

野を身につけてほしいと願ったのであろうし、鹿児島では、崇敬する西郷隆盛や一緒に亡くなった若者たちをキチンと弔って来いと命じたことでしょう。

「西南戦争民衆の記」(長野浩典)には、「明治11年の春(野焼きが終わった頃)、戦場となった宮崎、大分県境付近には、遺骨を求めて訪れる人びとがあった。鹿児島や宮崎から、戦死した兵士の遺族が、遺骨の収集に来たのである。」という記述が見られます。高鍋の人も多く亡くなっているのであるし、その遺骨収集団に誘発されての田原坂視察であったのかもしれませんが。いずれにしろ父親の強い思いと願い、さらには期待のこめられた修学旅行であったことは間違いありません。まだ物事を深く考え始める前に、先手を打ってこのような感性の教育を授けることの重要性を再認識することになりました。石井十次の偉さは、石井十次の父親の偉さでもあったのです。今回、友愛園の子供たちも、田原坂の地に立って、戦争の悲惨さを感じ取ることができたのではないかと思います。私たちは途中、近い墓地にも寄り、3時50分頃、山鹿市のホテルに向かいました。

30分ちょっとでホテルに到着し、それぞれ班ごとに部屋に入り夕食の時間まで思い思いにのんびりすごします。私は、ひと休みすると、夕暮れの迫る町の散策に出かけます。西南戦争時はこの山鹿周辺も激戦地となり、お寺等は野戦病院として使われたようです。今は、静かな温泉町。昔の豊前街道を少し登ると、共同温泉場や山鹿灯籠の民芸館、そして昔の劇場「八千代座」等がありました。

12月19日(日)は、朝8時すぎにホテルを出て、熊本城へ。前回来た時は、2016年の大地震で天守閣や石垣等がかなり傷んでいて中に入ることもできませんでしたが、復興も着実に進んでいて、天守閣に登ることができました。完全復旧までにはまだ16年ほどかかると、城の守衛の方が言っておられました。一通り天守閣の見学が終ると、班ごとに買物。私は急いでアーケード街の奥にあった古本屋めがけて歩きましたが、残念ながら、二軒とも姿を消していました。午後1時に城下の駐車場に集合。帰り横井小楠の「四時軒」(私塾)に寄って、高速道南回りで、家路につきました。

遠い江戸時代以前は、よく日本人同士で戦っていました。この友愛園のすぐ前でも435年前に豊臣軍と薩摩軍とが戦っています。豊臣10万に対して薩摩2万です。西南戦争と同じ規模の戦いであり、おそらく1000人単位の若者が亡くなったと思われませんが、もう何の痕跡もなく、その凄惨さ、恐ろしさについてはほとんど想像できません。

しかし、この西南戦争については、資料も充分に残っているし、自分の家族と重ね合わせることで、その悲惨さをイメージできます。兄弟同士、家族・親族同志殺し合うことほどの地獄はないでしょう。言わば、家族崩壊が理由でここに来た子供たちにとって、家族のありがたさを再認識する機会になったのではないかという気がします。そして、今、私たちが戦争のない平和な日本で生活できていることに感謝しなおす一日にもなりました。平和は、与えられるものではなく、やはり、一人ひとりの国民が日々作っていかねばならないものなのだろうと、強く思いました。思春期の子供たちは一度は訪れて学ぶべき場所だと思います。

第108回石井十次記念式挨拶

第108回石井十次記念式に御出席くださりましてありがとうございます。コロナ感染症第6波の渦中にありまして、宮崎県は一日の感染症が400人を越え、日本全体で日々8万人を越えるような状況下にあります。行政等であればこの行事も中止にするところでしょうが、石井記念友愛社にとってこの石井十次記念式は単なる行事ではなく、原点にもどる日、新たな誓いを立てる日でもあり、

100年以上にわたって今日1月30日に欠かすことなく続けてきております。

コロナ渦中ではありますが、本日、できるだけ少人数にさせていただき、挙行できておりますことを感謝します。

コロナ感染症が始まって、もう2年になります。ウイルスが地球を被いつくすような状態で、世界で560万人の方が亡くなり、日本でも1万8000以上の方が今までに亡くなっています。世界がグローバル化し、人々の動きに合わせてあっという間に感染域が拡散していきます。私たちの社会的養護の仕事は子供たちの生活の場、命を守る場であり、一日も休むことはできません。また、保育の仕事も、お父さんやお母さんの仕事を後方支援する仕事であり、できるだけ休園はさげなければなりません。私たちはコロナから逃げることはできない状況に置かれております。

私たちはウイルスを園に侵入させないように最大限の努力をし、綱渡りみたいなものですが、何とか防止できている状態です。

石井十次の時代にも赤痢やコレラ等の感染症は流行りました。実際、子供たちもたくさん亡くなっています。それから100年以上の年月がたち、文明は格段に発展し、医学も比較にならないほど進歩しています。しかし、このコロナ感染症の前では、人類は無力とは言いませんが非力でした。今、世界の医療関係者が必死にコロナウイルスと戦ってくださっています。一日も早い終息をお祈りしております。

それにしてもいずれ終息するにしろ、人間はこの大自然をコントロールすることなどできず、大人しく謙虚に共生し合っていかなければならないのであると思います。石井記念友愛社の「自然主義」をしっかりとかみしめたいと思います。

さて、石井記念友愛社の事業ですが、コロナ渦中にありましても、各事業所で職員たちがそれぞれにコロナ感染予防に努めながら、何とか経営・運営できております。一般のサービス業等において、経営危機におちいつているところが多い中で、我々の福祉事業が成り立っていることについて感謝したいと思います。今はじっと耐える時ではありますが、コロナ後のことも考え始めております。今日はそのことをだけを簡単に御報告し終りたいと思います。

一つは高鍋町にあります石井記念明倫保育園の改築であります。ヨーロッパでは、ペストが大流行した後の転換期にルネサンス（文芸復興）がおきたと言われています。このコロナ後、高鍋の明倫文化復興に何らかの貢献ができればと願っています。

もう一つは、都城の小規模児童養護施設「よしこの家」の隣接地に母子支援施設を建築することです。現在宮崎県には母子支援施設が存在せず、DVや虐待等が大きな社会問題となっている中で、その必要性が見直されて来ています。

石井十次墓前において、コロナ後を見通しながら、一步踏み出すことをお誓いし、挨拶とさせていただきます。本日は、ありがとうございました。